

発行所
田無神社社務所

〒188-0011
東京都西東京市田無町3-7-4
TEL 042-461-4442

編集発行人
賀陽智之



田無神社

第43号

水無月

令和7年夏越大祓式

「どなた様でも
ご参列頂けます」

田無神社では、例年「夏越大祓」および「鎮火祭」の神事を6月30日に斎行しております。

この「夏越大祓」は、私たちが日々の生活の中で知らず知らずのうちに身につけた罪や穢れ、災いを、1年の折り返しにあたる6月30日に「形代（かたしろ／人形）」に託して祓い清め、身も心もすがすがしく、健康で幸福な生活を願う日本の伝統的なお祓いの神事です。

神職と参列者が声を合わせて「天祓詞」を奏上した後、神職が先導し、茅の輪くぐりの神事を行います。その後、斎場を焚上場に移し、鎮火祭（ちんかさい）が執り行われます。鎮火祭は「ほしずめのまつり」または「ひしずめのまつり」とも呼ばれ、火の恵みに感謝し、その力が荒ぶらないよう祈念する祭りです。田無神社においては、鎮火祭は

大祓に用いた人形を焚き上げる前に斎行されます。

【斎行日時】

令和7年6月30日（月）

午前11時～午後3時（計2回斎行）

※本年も、多くのご参列が予想されるため、2回に分けて斎行いたします。各回とも神事の内容は同一ですので、ご都合のよろしい時間にご参列ください。

「茅の輪の設置」

例年通り、本殿前の参道に「茅の輪」を設置いたします。期間中は、茅の輪をくぐり、身体健全・疫病退散をご祈願ください。
※設置期間…令和7年6月7日（土）～6月30日（月）



茅の輪くぐりの様子

「形代（人形）の配布」

形代（かたしろ／人形）に氏名（ふりがな）・生年月日をご記入のうえ、ご自身の身体を撫でて清め、息を3度吹きかけてください。その後、形代を専用の袋に入れ、ご住所とお名前をご記入のうえ、社務所までお持ちください。

お預かりした形代は、6月30日（月）の夏越大祓式において、浄火にてお焚き上げいたします。形代（かたしろ／人形）は、6月1日（日）より社務所にて無料で配布しております。



鎮火祭の様子

風の匂い

賀陽智之

神を敬い、祖を慕い、自然とともに生きてきたはずの私たちは、いつの間にか生き方よりも豊かさを目を奪われるようになった。科学の探究はとどまることなく続き、宇宙の構造から微細な細胞の機能に至るまで、明らかにされつつある。しかしその一方で、こうした知の深化が、「なぜ生きるのか」という根源的な問いには沈黙していることにも、私たちは気づき始めている。さらには、感情や信仰、倫理といった人間の深い営みを、単なる錯覚と断じるような論調すら現れ、人々の心の奥には、不安や孤独、心の奥深くに巣食う虚しさが残っている。ウクライナでの戦火、中東で繰り返される報復の連鎖。人類は合理的な社会設計を目指しながら、いまだに暴力と憎悪に支配される。その背景には、合理性を超えた何かに目を向ける感性を失いつつある現代の私たちの姿が、浮かび上がっているように感じられてならない。人としてどう在るべきかという根源的な問いを脇に置いたまま歩んできたことが、今のこの状況を生み出しているのかもしれない。

朝日を浴びてゆつくりとまぶたを開く瞬間。あるいは、誰もいない朝の道を歩きながら、静けさの中でふと何かに気づくとき。そんなさやかな場面にこそ、私たちは生きているという感覚を、そと取り戻すことができる。私たちは普段、時計の針の音に背中を押されるように、めまぐるしい日常を駆け抜けている。予定に間に合わせるために動き、効率を優先し、成果を数字で測ろうとする。便利さと正確さに囲まれていながら、どこかで心が置き去りにされているように感じることもある。けれど、本当に「生きている」と実感できる瞬間は、そうした直線的な時間の流れからふと外れたときにこそ訪れるのではないだろうか。心が動く。言葉にならない何かが、そとと胸に満ちてくる。それはきつと、何かを達成したときの誇らしきとも、誰かに褒められたときの喜びとも違う、もつと「根源的な感覚」で、それこそが、生きていることのかげがえのない証なのだと思ふ。

止めることがある。どこからともなく運ばれてくるその香りは、木々の間をすり抜け、私たちの記憶の奥に語りかけてくるようだ。ケヤキの葉が静かに揺れ、木漏れ日が石畳に模様を描く。穏やかな風が参道をそとと吹き抜けると、ただその場に佇むだけで心が整っていくのを感じる。その瞬間、「ああ、自分はここに生きている」と、静かな実感が胸を満たす。それは、日々の暮らしの中で誰もが実践できる、ささやかでありながら、かけがえのない営みである。静寂に包まれた空間で、自然の息づかいに耳を澄ませながら、私たちはそとと自分の内面と向き合うことができる。そこには、長い年月をかけて人々の祈りが積み重ねられ、風や光とともに、見えない何かが静かに息づいている。風とともに運ばれてくる「気配」は、言葉を紹介さずとも、私たちの心に深い何かをそとと伝えてくれているように思う。神社という場所は、本来そうしたと気づきと神への祈りが静かに交差する、特別な場所なのだろう。

人は皆、心の奥底で、何か大きなものに見守られながら生きていたいと願っている。自分という小さな存在が、広い世界の中で決してひとりではないと、どこかで信じていたのだ。それは神様なのかもしれない。自然かもしれない。あるいは、遠い記憶のなかに響く祖先の声かもしれない。そうした存在を心のどこかで無意識に感じながら、人は日々を生きているのだと思ふ。生きる意味を考えることに、特別な知識や肩書きはいらない。生きることに少し疲れたとき、意味を見失いかけたとき、どうか神域を歩いてみてほしい。鳥居をくぐり、少しずつ足を進めながら、空気の違いにそとと耳を澄ませて、風の匂いに気づいてみてほしい。見上げれば、空はどこまでも高く、雲がゆるやかに流れてゆく。その風景のなかで、自分もまた自然の一部であることを思い出す。風をつかさどる神、級津彦命（シナツヒコノミコト）・級戸辺命（シナトベノミコト）は、あなたの問いかけにそとと寄り添い、静かに応えてくださるかもしれない。たとえわずかな時間でも、呼吸を整え、立ち止まり、風の音や自然の息づかいに耳を傾けることで、胸の奥にそとと温かな光が灯り、それぞれの人生における生きる意味が、静かに浮かび上がってくるのではないだろうか。

田無神社農園

5月1日(木)、田無神社農園にて、トマト、ミニトマト、ナス、ピーマンの苗を植え、枝豆の種を蒔きました。これらの作物は、夏越の大祓の祭典前に収穫し、ご神前にお供えいたします。

田無神社農園とは

御遷座三五〇年祝賀事業の一環として、令和2年(2020年)に実施された裏山の整備工事により、所沢街道側の石垣上に新たなスペースが生まれました。この場所を活用し、令和3年(2021年)4月20日、下田農園の下田将人氏のご指導のもと、「田無神社農園」として開墾を行い、耕作を始めました。

田無神社農園では、毎月1日に斎行される月次祭にて神前にお供えするため、春には夏野菜、秋には冬野菜の種まきや苗の植え付けを行い、季節に応じたさまざまな野菜を栽培しております。また、地域の子どもたちが農業体験や収穫体験を通して自然と触れ合い、心豊かな人間へと成長すること、そして忘れられない特別な思い出

を作ることを目的としています。

今後も、下田将人氏のご指導のもと、祭典やお祭りにお供えする野菜・果物の栽培を継続してまいります。農園での栽培の様子などは、田無神社公式ホームページおよびSNSにて随時ご紹介いたします。



土作り



トマトの苗植え



枝豆の種まき



トマトの苗を支柱に固定する

シリーズ 「神社と戦争」

第3回 満州事変と日中戦争③

令和4年（2022年）に刊

行した御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』の第8章「神社と戦争」では、祝詞や各種資料を通じて、田無神社と戦争との関わりについてまとめました。その際、紙幅の都合により掲載できなかった祝詞や資料について、今後、田無神社報にて数号にわたりご紹介してまいります。

第1回目では、以下の内容を取り上げました。「満州事変勃発奉告及び武運長久祈願祭詞」「満州帝国皇帝陛下御安全祈念祭詞」「戦時下の津嶋祭」「日中戦争 辭別に關する通知」「二・二六事件 臨時祭祝詞」「天國魂神社における武運長久祭の齋行」「国体明徴歌十首」、続く第2回目では、以下の内容を取り上げました。「関東防空演習執行に付き例祭日変更願」「南京陥落戦捷奉告祭詞案」「聖體御安泰奉告祭案」「帝都復興記念祭詞」「東京府民諸君二告ぐ」「国威発揚祈願祭講演会パンフレット」「田無神社社号碑」、今回の第3回目は「国威宣揚・皇軍戦勝祈

願祭詞案」「慰問袋内容ノ参考」「神

この祝詞は、昭和12年（1933

詞案です。

官神職等二對スル業務用衣料品購入票發給二關する件」をご紹介します。 (1938年) 7月7日に奏上するよう、東京府神職会から出された国威宣揚・皇軍戦勝祈願祭の祝詞案です。

国威宣揚・皇軍戦勝祈願祭詞案

國威宣揚 祈願祭詞案

掛氣久母畏後、某神社能大前爾、官司司社掌位勳功爵氏名恐美、恐美母白左久、義爾天皇支那乃心邪、爾頃送、奈留人等天地乃正志、道乎得悟良受、互爾和美睦、共爾立榮由借佳好親有留我國乎、只管惡狀、爾言言利、先年與利屢、盟比且志事等乎、忘禮且、皇軍乎輕志、米侮利、我國民乎傷氣害、爾留乎、憂比思、保志食、且荒、見疎、夫留敵軍乎、誅爾、米給彼車止爲、且、皇軍乎增遣、志給比志與利、既久母一年爾成利奴。此乃一年乃程爾、皇軍人乃海乎越、彼國爾押涉、利、野爾山爾、海爾河爾、伊向、布敵等乎擊、攘比、險志、彼國、丘爾、大俊小、幾多、乃岩乎、堅、久築、役且、如何、爾攻、止母落、留事、設有良、且止、思、恃、美、千萬、乃軍人、十重、二十重、屯、居、且、如何、奈留、強、後、軍、母、近、寄、世、自、止、言、誇、爾留、城、乎、母、日、乃、御、旗、乃、向、布、處、戰、爾、必、勝、知、攻、車、禮、婆、必、取、利、去、年、乃、主、月、爾、彼、國、乃、首、都、止、定、米、都、留、南、京、乃、城、乎、拔、後、今、年、乃、五、月、爾、波、四、方、八、方、爾、往、通、布、八、衢、爾、當、爾、徐、州、乃、城、乎、落、志、且、更、爾、與、深、久、進、往、後、此、處、彼、處、乃、要、害、乃、地、爾、取、利、奴、是、乎、以、且、敵、等、波、口、爾、波、賢、志、氣、爾、言、爾、村、勢、日、爾、縮、萬、利、皇、軍、人、波、猛、後、雄、志、後、心、彌、益、々、爾、加、波、利、奴、斯、久、短、後、月、日、爾、大、俊、奈、留、捷、乎、獲、多、留、事、波、古、與、外、國、爾、何、例、無、久、此、波、專、良、大、神、等、乃、廣、後、厚、恩、爾、爾、因、禮、利、止、婚、志、美、辱、美、今、日、乃、生、日、乃、足、日、爾、御、饗、御、酒、種、々、乃、物、乎、捧、氣、奉、利、且、事、乃、狀、乎、告、氣、奉、良、久、乎、平、氣、久、安、氣、久、聞、食、志、且、今、母、往、前、爾、彌、益、々、爾、夜、乃、守、日、乃、護、爾、守、幸、波、爾、給、比、皇、軍、人、波、海、爾、陸、爾、冠、布、敵、乎、姿、悉、爾、擊、攘、比、攘、退、氣、且、服、從、比、奉、良、志、米、國民、諸、波、力、乎、戮、世、心、乎、一、爾、志、且、事、每、爾、勤、米、結、乃、利、後、事、無、久、撓、乎、無、久、仕、奉、利、天、皇、乃、大、御、殘、威、乎、彌、廣、爾、輝、加、志、米、給、比、大、御、彰、乎、彌、高、爾、仰、後、奉、良、志、米、給、閉、止、恐、美、恐、美、母、白、氣。

慰問袋内容品ノ参考

- 一、日用品
 - タオル、ハンカチ、手拭、襪、サルマタ、靴下、塵紙、硬水用石鹼（支那ハ到ル所硬水デアリマスカラ普通石鹼ハ水ニ溶ケニクイノデス）齒磨、楊子
 - 二、通信用具
 - 給葉書、封緘葉書、便箋、封筒、鉛筆（ゴム付黒）、色鉛筆（赤、青）、手帖、懐中用ナイフ（小）
 - 三、嗜好品
 - 菓子類（砂糖類、角砂糖、甘納豆、キヤラメル、ドロツプス等ニシテ何レモ罐入ノモノ）、煙草、干物、罐詰類（果物罐詰等ハ特ニ可）味付海苔、鹽豆類（丈夫ナル罐入ノモノ）
 - 四、懷中藥
 - 仁丹、寶丹、カオール、メンソレ、トクホン等
 - 五、慰安的ノモノ
 - 雜誌類（講談、娛樂雜誌等）、新聞（最近ノモノ）
 - 六、其他御氣付ノモノ
 - 慰問文、慰問畫（手藝品及小學生女學生等ノ作品）、優美ナル寫眞、携行用琴、將棋等
- 以上種々掲記しましたが何品でも結構です要するに將兵の最も喜ぶのは品物の多寡、高下ではなく寄贈者の熱意であります慰問文は最も喜ばれます、名刺、寫眞、手藝品、其他記念品として永く残り得るものは最も結構でありますが発送より本人受領まで早くて一ヶ月以上を経過し又運搬、格納中は相當の重壓が加はりますから保存に堪へる様に御注意下さい
餅類や紙袋に入れた菓子類、菓類は御入れにならぬ様にして下さい

盧溝橋事件とは、昭和12年（1937年）7月7日、北京郊外の盧溝橋付近で日本軍と中国軍が交戦した出来事です。その後、7月25日には日中両軍が本格的に衝突し、さらに上海で日本海軍の将校が殺害されたことをきっかけに、8月13日には第二次上海事変が発生しました。これら一連の出来事を経て、日中戦争へと突入していきました。

祝詞文中に「去年乃十二月爾波彼國乃首都止定米都留南京乃城呼拔伎」との記述があります。これは日本軍が中華民国の首都・南京において、城壁を挟んで激しい戦闘を繰り広げ、同地を陥落させたことに言及したものです。日本軍が南京を占領したのは、昭和12年（1937年）12月13日のことでした。また、祝詞文中には「今年乃五月爾波、四方八方爾往通布八衢爾當禮留徐州乃城呼落志豆……」との記述があります。これは、日中戦争中の昭和13年（1938年）に、日本軍が江蘇省の徐州を目標として、中国軍と一連の戦闘を繰り広げた「徐州会戦」のことを指しています。この作戦において、日本軍は約20万人を投入し、約60万人にのぼる中国野戦軍の主力を包圍・殲滅しようと試みました。

最終的に、5月19日に徐州を占領しました

慰問袋内容ノ参考

こちらは、昭和13年（1938年）2月5日に東京府神職会より出された「慰問袋に関する件」に関する書類のうち、慰問袋の内容

品に関する参考資料にあたります。戦地で使用される日用品をはじめ、兵士たちが余暇を過ごす際に活用できる玩具や嗜好品など、さまざまな品が慰問品として送られました。日中戦争の勃発により、国内全体が戦時体制に組み込まれると、前線への慰問品の送付が盛んに行われるようになりました。

5月11日に、商工省繊維局長が地方の知事宛に送付した、「業務用衣料品購入規則」に関する書面です。戦時下の日本では、生活に必要なさまざまな物資が不足するようになり、昭和17年（1942年）からは衣料品に関しても切符制が導入されました。しかし、太平洋戦争の激化に伴い、現物の配給はほとんど行われなくなり、制度は有名無実化していきました。



一七級局第三〇一五號
昭和十七年五月十一日

商工省繊維局長 西川 浩

知事殿

神官神職等ニ對スル業務用衣料品購入票發給ニ關スル件

今般神官神職等ニ對シテハ神宮神社ニ奉仕スル關係上特ニ其ノ申請ニ依リ業務用トシテ一ヶ年ニ左記範圍内ノ衣料品ノ購入ヲ認ムルコト相成候條申請内容ヲ審査シ最少必要限度ノ業務用衣料品購入票ヲ發給相成候致度此段及通稱候也
追而神官神職ニ新ニ就職シタル者ニ對シテハ發シ昭和十七年三月二十七日附一七級局第二三一四號通牒ヲ以テ特別衣料切符ヲ支給スルコト相成居候ニ付テハ初年ニ限リ業務用衣料品購入票ヲ發給セザルコト致度申添候

記

- 一、神宮職員ニ對シテハ白衣二枚單衣一枚袴一枚又ハ白衣二枚分ノ生地白袴一枚晒一反廣幅物ハ六平方碼白足袋一〇是主トシテ事務ヲ掌ル者ニ對シテハ三足
- 二、神宮現業者ニ對シテハ白衣二枚單衣一枚袴一枚又ハ白衣二枚分ノ生地白袴一枚
- 三、官國幣社職員ニ對シテハ白衣二枚單衣一枚袴一枚又ハ白衣二枚分ノ生地白袴一枚晒一反廣幅物ハ三平方碼白足袋八足
- 四、其ノ他ノ神社職員ニ對シテハ白衣二枚單衣一枚又ハ白衣一枚分ノ生地白袴一枚晒一反廣幅物ハ三平方碼白足袋六足

慰問金の募集が全国的に慰問活動が広がり、定着していきました。戦時中には、戦地に赴いた兵士たちに慰問品を送ることが、「銃後のつとめ」の一つとして奨励されていたのです。

神官神職等ニ對スル業務用衣料品購入票發給ニ關する件

こちらは、昭和17年（1942年）

5月11日に、商工省繊維局長が地方の知事宛に送付した、「業務用衣料品購入規則」に関する書面です。戦時下の日本では、生活に必要なさまざまな物資が不足するようになり、昭和17年（1942年）からは衣料品に関しても切符制が導入されました。しかし、太平洋戦争の激化に伴い、現物の配給はほとんど行われなくなり、制度は有名無実化していきました。文中には、神職に対して次のような物品の購入が認められると記されています。

白衣一枚、または白衣一枚分の生地、白袴一腰、晒袴反（さらしはんたん）、白足袋六足がそれにあたります。ただし、伊勢の神宮および官國幣社の神職に対しては、これよりも多くの衣類の購入が認められていました。

実際に、田無神社では、三尺六寸五分の着丈の白衣一枚、白足袋六足、二尺二寸五分の白袴一腰を注文した記録が残っています。

そのほか、日供や祭礼で用いる御神酒についても配給制の対象となり、田無神社、尉殿神社、下保谷天神社では、大祭用として御神酒三本を東京府知事に要請した記録が確認されています。

境内の石造物

令和4年(2022年)に刊行された御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』(1)の第6章「境内の石造物」では、鳥居や狛犬をはじめとする多数の石造物が紹介されています。この章内の「田無神社の碑刻銘文選」の項目は、武蔵野大学教育学部教育学科の廣瀬裕之(舟雲)教授が、「供養塔」「石壘銘」「本殿基壇銘」「將軍山碑」についてまとめられました。ここでは、その中から「將軍山碑」について、概要をご紹介します。

將軍山碑

田無神社北参道入口には、かつて康樂園に所在した「將軍山碑」があります。

五日市街道の柳橋交差点から、同街道に沿って東側に広がる共同墓地にかけての広大な敷地は、かつて平井家の所有であり、広大な梅林および桜林が設けられ、明治後期には「康樂園」という大規模な庭園が存在していました。この敷地内には池と国香神社も建立されていたとされ、当時の当主は保谷村長を務めた平井週作でした。

『保谷市郷土史研究会々報・けやき』(2)によれば、閑院宮載仁親王が小金井桜の観桜に訪れた際、道中でその美しい庭園が目にとまり、立ち寄られたと伝えられています。その際、当主が築山の命名を懇願したところ、親王により「將軍山」と揮毫されたとされています。

書風は穏やかな王羲之風であり、「將」と「山」は行書、「軍」は草書で揮毫されています。特に「山」字は、王羲之の「蘭亭序」に見られる「山」の字形および筆脈と近似しており、中国の法帖の書をよ

く学ばれた優雅な書であるといえます。

康樂園は、当時「保谷八景」の一つに数えられた名所でした。園内には築山があり、小川が流れ、広大な敷地に梅と桜の木が千数百本も植えられていたとされます。「東の方に大きな池があり、池には波紋ができるほど多くの鯉が泳ぎ、鯉が水面から飛び跳ねた。梅花の時期には芳香を放ち、桜の花は空を覆い隠すほど咲き乱れ、五月には菖蒲の花が水辺に紫の絨毯を敷き詰め、夏には蓮の花が見事に咲き誇り、渡り鳥も時を忘れて

飛来した」と記録されています。庭の築山から眺望する富士山は、まるで絵巻物を鑑賞するかのようであったとも伝えられています。

この築山を閑院宮が「將軍山」と命名し、その揮毫を平井週作が明治45年5月に碑石に刻し、園内に建立したものです。「將軍山碑」は、保谷と小金井桜を結ぶ歴史資料として、また親王直筆の刻書による「將軍山」の存在を伝える資料として、さらに、現在では幻となった「康樂園」の存在を今に語り継ぐ極めて貴重なものであるといえます。



(1) 賀陽智之(2022)『御遷座三五〇年記念誌写真と資料から見る田無神社』ハレル舎 pp.258-281

(2) 保谷市郷友会編集『保谷の歴史』(上) 昭和50年9月

(3) 廣瀬裕之『田無神社の碑刻銘文選』 pp.224-226(賀陽智之(2022)『御遷座三五〇年記念誌写真と資料から見る田無神社』)

「祭神

本殿の神々について
ご紹介いたします。

田無神社は主祭神として級津彦命・級戸辺命、大国主命をお祀りしています。その他の神様として、本殿に八衢比古神・八衢比売神、須佐之男命、倉稻魂命、應神天皇、猿田彦命、大鳥大神をお祀りしています。

内務省神社局の指導の下、明治39年（1906年）から明治43年（1910年）にかけて神社合祀が実施されました。これにより、府県社以下の神社は、約19万社から13万社に整理されました。田無神社は、神仏分離令に従い、明治43年（1910年）に町内の5つの神社を本殿に合祀いたしました。この5社は、上向台に鎮座する八衢比古神・八衢比売神を主祭神とする八幡神社、下向台に鎮座する須佐之男命を主祭神とする八坂神社、北芝久保に鎮座する倉稻魂命を主祭神とする稲荷神社(1)、上宿に鎮座する應神天皇を主祭神とする八幡神社、そして谷戸に鎮座する猿田彦命が主祭神の熊野神社で

す。その後、昭和24年（1949年）に大鳥神社より大鳥大神が分祀されました。

合祀について『田無市史第4巻 民俗編』には次のように記されています。

「それぞれの地区の鎮守神は、田無神社に合祀された際、神輿や賑やかなお囃子の先導で田無神社に送られたという。しかし、合祀後も天王様の祭礼には各地区のかつての鎮守神を担ぎ、神輿や太鼓で田無神社に繰り出していた。こうしたことは昭和30年頃までは盛んに行われていたという。」(2)

明治7年（1874年）の賀陽家（宮司家）の戸籍には、田無神社の末社として八幡神社1社、熊野神社1社、白山神社1社、稲荷神社3社が記載されており、ここでいう「末社」とは、現代における境内に鎮座する小規模な神社のことではなく、村内で管理されていた神社のことを指します。八幡神社は上宿、熊野神社は谷戸、白山神社は谷戸、稲荷神社の3社は北芝久保、上向台、南芝久保に、それぞれかつて鎮座していた神社です。

『田無市史第四巻 民俗編』には、「明治初期、白山神社も野分初稲荷もお上の命令で田無神社に合祀されたとも伝えられる。」(3)と記されています。しかし、現在、田無神社では本殿・摂社・末社において、白山神社の御祭神である白山比咩大神をお祀りしていないため、真偽のほどは定かではありません。

大国主命は出雲大社の祭神であり、日本各地の神社において祀られております。大国主命は、海の向こうから来訪した少彦名命と協力し、日本国の開拓と経営に尽力され、葦原中国（日本国の異称）の主となりました。その後、天照大御神の命を受け、葦原中国平定のために天降った武御雷神に国を譲り、幽界にお隠れになられました。

級津彦命・級戸辺命の二柱は、龍田大社や伊勢神宮内宮の別宮である風日祈宮、外宮の別宮である



風宮などにおいて祀られる風を司る神々です。元寇の際には神風を吹かせ、日本の国土を守護された靈験あらたかな神々です。田無神社では、五行思想に基づき、本殿に級津彦命・級戸辺命を金龍として祀り、境内各所に黒龍、白龍、赤龍、青龍を配祀し、『五龍神』として信仰されており、この五色は、古代中国に成立した陰陽五行説に基づくものであり、「木・火・土・金・水」の五元素は、色彩や方位、季節、時間など多岐にわたる事象に当てはめられます。「木・火・土・金・水」を色で表すと、「青・赤・黄・白・黒」となり、方位では「東・南・中央・西・北」を示します。

★ ★ ★ ★ ★

(1) 北芝久保に鎮座する稲荷神社は「トウカメ稲荷」と呼ばれています。田無神社に合祀後の昭和16年（1941年）、北芝久保に住む氏子たちの願いにより、元の稲荷神社の鎮座地に再度祀られることとなりました。

(2) 田無市史編さん委員会（1990）『田無市史第4巻 民俗編』 精興社、pp.93-94

(3) 田無市史編さん委員会（1990）『田無市史第4巻 民俗編』 精興社、p.98

覚えたら、さっそく対局してみよう！
お友だちや家族と一緒に、将棋を楽しもう！

初心者
大歓迎

田無神社 しょうぎ 将棋 交流会

こうりゅうかい

日本将棋連盟吉本興業支部公認

はじめてでも大丈夫！やさしい先生が、
駒の動かし方からしっかり教えてくれます。

王将

7月6日 日 10:00～12:00

場所：田無神社 参集殿

東京都西東京市田無町 3-7-4 (田無駅北口下車徒歩7分)

講師：ふみお (日本将棋連盟吉本興業支部・将棋普及指導員)

【対象】 初心者・初級者 (大人のみの参加も大歓迎)

【内容】 将棋入門講習 (駒の動かし方、基本ルール)

対局タイム (スタッフがサポートします)

【参加費】 1000円 (途中参加、退室OK)

【申込み】 QRコードからお申し込みください

お問い合わせ：frmakb@gmail.com



竜

歩兵



し

香車

金将

龍王

神社からのお知らせ

津島神社祭礼

津嶋神社の神輿は、かつては7月15日の津嶋祭に合わせて渡御しておりましたが、現在では、7月第2週の土曜日を宵宮、日曜日を本宮と定め、本宮の日に神輿が担がれるようになっております。本年は7月13日(日)に柳沢津嶋神社の天王祭を斎行し、神輿が出御します。

宵宮7月12日(土)の午後6時には、柳沢集会所に鎮座する津嶋神社において、宵宮祭・出御祭が斎行され、その後、御旅所にて入御・動座祭が執り行われます。本宮7月13日(日)の正午には、柳沢ガード下付近で発輿・神幸祭が斎行され、津嶋神輿が出御いたします。その後、津嶋神輿は田無神社に立ち寄り、境内の津嶋神社前にて天王祭が斎行されます。

神輿は柳沢地区(田無一区)を巡行し、午後6時には柳沢集会所に鎮座する津嶋神社にて還幸祭が斎行されます。

昭和頃までは、一区の津嶋神社の神輿と二区の天王様の神輿とが、それぞれの神輿に祀られた鳳

凰を奪い合う「喧嘩神輿」が行われておりました。

この喧嘩神輿は、現在の下田邸(旧田丸屋)と浜中米店の間付近で対峙したと伝えられております。



向台大太鼓

令和4年(2022年)より、津嶋祭の本宮において、津嶋神輿が境内に進む際、田無五区および六区の向台大太鼓が先導し、参道を清める役割を担っています。

本年は、7月13日(日)に向台大太鼓が向台地区から田無神社まで巡幸し、その綱は境内入り口付近から、田無五区および六区の氏子によって引かれ、北参道まで進

みます。お神輿は7月13日(日)12時45分頃に境内へ到着予定、向台大太鼓は正午頃に境内へ到着予定です。

この向台大太鼓は、かつて向台地区の氏神であった八坂神社(明治43年、一村一社の合祀令により田無神社に合祀)の天王祭において使用されていたものです。

戦時中、空襲により八坂神社跡地の倉庫から焼き出され、新井家(現・田無神社総代)の蔵に保管されました。その後、昭和末期に尾林家(現・尾林造園)の蔵へ移されましたが、巡幸などの行事に使われることなく、長い年月が経過しました。



令和3年、台車が新調され、太鼓革も貼り替えられ、見事に蘇りました。現在では、境内において柳沢津嶋神社の神輿渡御を向台大太鼓が先導し、田無神社境内で両者が邂逅する様子は、祭りに新たな彩りを添えています。

御田植祭

6月7日(土)午後2時より、龍神池において御田植祭が斎行されます。御田植祭は、稲作の手順を儀礼化した古くから伝わる神事であり、田無神社では五穀豊穣を祈念して行われます。当日は、龍神池の浅瀬に稲の苗を植えつけ、豊かな実りを祈願いたします。収穫された稲は、10月の大祭において、神輿の鳳凰に括り付けて奉納されます。



耐殿天王祭

悪疫除けの神である牛頭天王の夏のお祭りですが、兼務社である耐殿神社において、6月15日(日)午後1時より斎行されます。牛頭天王は、疫病除けの力を有する御神格をお持ちです。夏の暑い時期には、疫病をはじめ多くの病気が流行しやすく、それらを防ぎ、追い払う神として広く信仰されています。

三社祭

6月17日(火)午前10時より、大鵬土俵前で三社祭を斎行いたします。三社祭は、塩竈神社、煩大人神社、大鵬土俵の三社のお祭りです。塩竈神社の例祭日は、古くは5月5日でありましたが、その後7月10日に移り、最終的に三社祭の6月17日が例祭日となりました。また、煩大人神社の例祭は、以前は7月15日の津島祭に合わせ斎行されていましたが、現在では三社祭として6月17日に行われるようになっております。

戦没者慰霊祭

8月15日(金)正午より、日露戦争戦役記念碑前において慰霊祭が斎行されます。一般の方の参列

のもと、英霊に追悼の誠を捧げ、感謝の意を奉告いたします。どんな様でもご参列いただき、玉串拝礼が可能です。予約は不要です。正午までに日露戦争戦役記念碑前へお越しください。

初穂祭

8月23日(土)午後2時より、兼務社の下保谷天神社において初穂祭が斎行されます。初穂とは、秋の稲の収穫に先立ち神に献じる、熟した稲穂のことです。初穂祭は、田んぼの神様に感謝し、豊作をお祝いする祭礼です。

七夕てるてるトンネル

色とりどりのてるてる坊主が飾り付けられた「七夕てるてるトンネル」は、6月13日(金)から7月21日(月)まで、田無神社境内に設置されます。

平成26年(2014年)から平成30年(2018年)までは、竹と笹によるトンネルが境内に設置されておりましたが、令和元年(2019年)より、この時期が梅雨にあたることから、トンネルにてるてる坊主が飾られるようになりました。

七夕てるてるトンネルは、御祭神である級津彦命・級戸辺命に感

謝を捧げ、台風や雨風などの災害なく、農作物が順調に成長することを祈念して設置されるものです。参拝者は、てるてる坊主の短冊に願いを記入し、トンネルに結びつけることができます。「てるてる短冊」には顔を描き、皆様のお願いを書きいただき、トンネルに結びつけてください。てるてる短冊は、田無神社のおみくじ処にて一枚300円で頒布いたします。



開かれた神社

バケツ稲作り

農業協同組合(JAグループ)からいただいた、「バケツ稲作りセット」を4月26日(土)より先着順で配布しました。このセットは種籾と肥料、栽培マニュアル、お名前シールがセットになっています。収穫された稲は、例大祭稲受け取り期間中に田無神社までご奉納ください。お預かりした稲は、お神輿にくくりつけてお供えさせていただきます。例大祭期間10月1日(水)～10月10日(金)
例大祭当日10月11日(土)・10月12日(日)



田無神社西側工事

田無神社西側道路の通行の安全を確保するため、3月6日（木）より、田無神社西側道路のセツトバック工事および神社敷地内のアスファルト舗装新設工事を実施してまいりました。

この工事により、田無神社西側道路に面していたブロック塀を取り壊し、約1.69メートル後退（セツトバック）させて道路幅を4メートルに拡張するとともに、田無神社境内地の一部にアスファルト舗装を施し、道路と神社敷地を合わせて5.5メートルの幅員を確保いたしました。あわせて、道路沿いには土留めの塀を設置し、6月中にはその塀沿いに「マンサク」の植栽も行う予定です。美しく生まれ変わわり、安全に通行できるようになった田無神社西側道路の様子を、ぜひご覧ください。

工事期間中は、一部区間において車両通行止めとなり、参拝者の皆様にはご不便をおかけいたしましたこと、ご理解とご協力を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

端午祭と菖蒲

端午の節句に際し、5月4日（日）に、端午前日祭を斎行し、

邪気を祓う菖蒲を祓つ物として待合殿の屋根に投げ入れました。端午祭は、翌5月5日（月）午後4時より、社殿にて斎行いたしました。穢れや邪気を祓い、お子様の健やかな成長を祈念いたしました。



わんぱく相撲西東京場所

5月18日（日）、田無神社にてわんぱく相撲西東京場所が開催されました。

参加した子どもたちは、昨年と同様に約300名にのぼり、コロナ禍以前と同じ規模での開催となり、境内は多くの来場者で賑わいました。

各学年で優勝したわんぱく力士たちは、6月に開催される東京都大会へ出場いたします。

皆様の温かい応援を、どうぞよろしくお願いいたします。

わんぱく相撲は、青年会議所の主催により開催されており、子どもたちが日本の国技である相撲を通して、心身の鍛錬と健康の増進を図ることを主たる目的としています。

かすみ草の押し花みくじ

小さくて丸い花が可愛らしいかすみ草。その潔白な花姿にちなみ、花言葉には「清らかな心」が込められています。このおみくじには、かすみ草の生花を丁寧に押し花にして添えております。日々、清らかな心で過ごせますように——そんな願いを込めたおみくじです。
初穂料…300円



五穀豊穡春祭 電祭斎行

責任役員並びに氏子総代参列の下、4月28日（月）午前10時より田無神社社殿において五穀豊穡春祭・電祭が斎行されました。

電祭は、正式名称を「五穀豊穡春祭・電祭」と改称し、毎年4月の総代会において祭日が決定されます。祭典では、五穀豊穡祭祝詞および水雨祭祝詞が奏上されます。電祭の起源については、明治41年（1908年）および昭和10年（1935年）に発生した大規模な電害のいずれかを契機とする、二つの説が存在します。

春の茶会

4月13日（日）、西東京市茶道華道文化協会主催の「春の茶会」が開催されました。和室席は、国登録有形文化財である参集殿にて、野点席は花時雨が舞う舞殿に設けられ、多くの来場者で賑わいました。



令和7年祭典の様子



紀元祭(2月11日)



節分追儺祭(2月2日)



祈年祭(2月17日)



賀陽家屋敷稲荷初午祭(2月6日)



野分初稲荷初午祭(2月6日)



端午前日祭(5月4日)



上巳の節句祭(3月3日)



天長祭(2月23日)